

考えたくないことについて、どこまでも考えよ

16年前に阪神・淡路大地震を体験した私たちは、その朝、街の一変した無惨な光景に声を呑んで、足がすくんでいました。1989年のサンフランシスコ大地震で高速道路が倒壊したとき、「アメリカなど海外の道路と違って日本の高速道路は関東大震災クラスの地震がきても絶対に崩れない」と建設官僚は胸を張っていたのに、阪神高速道路3号神戸線は倒壊しました。震源地に近い兵庫県尼崎市や西宮市を走る山陽新幹線高架橋も巨大な橋げたが崩れ落ち、線路も宙ぶらりんになっていました。その新幹線の「安全神話」をあざ笑うように、大きな余震が来ると崩落しかねない、ボロボロになった高架の柱に沿って建っているありふれた小さな民家が、なにもなかったように泰然としていたことを昨日のこのように覚えています。

大企業の高層ビルも途中階だけがペシャンコになったり、フライ返しの上に上からたたいたようにペシャンコになるパンケーキ型崩壊が続出したことに、専門家は驚いていました。施工不良も多くみられ、地盤の脆弱さと免震構造の不十分さによって、1981年の建築基準法をクリアしていない高層マンションの倒壊が目立ちました。木造民家の破損、倒壊もおびただしく、台風に強い屋根の重い構造の家ほど、被害が大きく、死傷者数の増加の原因となりました。

私と仲間が作成した当時の40数冊の資料集をめくりながら、いまこの文章を書いています。この都市災害の甚大な被害を前にして、対策コストの負担の大きさから震度5以上の耐震基準を設定していなかったことの反省を踏まえて、復興計画が着手されました。このとき、おそらく被災した私たちだけでなく、日本中の人々が、いや、世界中の人々の脳裏をよぎったのは、もし巨大地震が原発を襲っていたなら、どうなっていたか、という考えたくもない不安だったはずです。

15基が集中する原発銀座の福井の前回無投票だった県議選では、増設反対や凍結を口にする立候補予定者が相次ぎ、東北電力の巻原発計画への反対行動や、東京電力の柏崎刈羽原発がある柏崎市での脱原発の動きなどに対して、日本原電による「大地震にも万全の備えをしています」の新聞折り込みチラシや、東京電力による新潟県での「阪神大震災規模でも柏崎刈羽原発は安全です」のチラシ配布で住民への説得に努めていましたが、日本原電が阪神大震災級の地震が起きた場合の原発の地盤の揺れを推定した結果、国内で運転中の原発51基のうち48基で、国の安全審査基準の耐震設計値を上回る強い揺れになることが明らかになりました。

電力会社の「安全審査とは別に独自に耐震性をチェックし安全策を講じている」という説明に、脱原発派は「安全神話が崩れたことを示す重大なデータだ」と反論し、原発設置前に行われる国の安全審査では、建屋や機器の重要度順に、原子炉格納容器などをA S、緊急炉心冷却装置などをAに分類し、その分類ごとに震設耐計値が決められ、今回の東日本大地震で原発事故を起こした福島第一1-6、第二1、2など30基が問題だったのに、電力会社は「すべての原発について耐震性を独自に調査して安全確認した」「強い揺れがあると原子炉が自動停止する」などと説明し、各社の独自調査データについては「企業秘密」と言い、資源エネルギー庁と科学技術庁も「各電力会社が阪神大震災級の地震を想定して、国の審査とは別に、安全性を確認しているようだ」と後押ししました。

民間の原発監視団体「原子力資料情報室」は、「安全と言うなら、根拠となる情報すべてを第三者がチェックできるように公開すべきだ」と反論しましたが、日本の原発の立地点が選定され始めた1960年代は、活断層に対する認識が低く、あまり考慮せずに立地した側面があると言われ、78年以前には原発の「耐震設計審査指針」すらなく、81年によりやく定められたのです。しかし、その耐震設計も「原発の直下でM6・5が起きた場合」を想定しており、M6・5の理論的な根拠が明らかにされないまま、「原発耐震性見直し不要」の報告書が8ヶ月後に、原子力安全委員会の安全検討会から提出され、資源エネルギー庁と科学技術庁からも同じ報告がなされました。

「地震と原発事故が重なった場合の緊急時対策」として、16年前に「原子力資料情報室」代表の高木仁三郎氏はこう指摘しています。「たとえば静岡県による東海大地震の被害想定に、浜岡原発が事

故を起こすことは含まれていない。他方、浜岡原発の防災対策では、原発が事故を起こしたときに地震で動きが取れなくなることは想定していない。地震時の対策にも原発の事故時の対策にも、さまざまな不備が指摘されており、それらが重なったら対応は不可能だろう。／原発の重大事故に際しては、専門家が、現地災害対策本部および当該の原発に派遣されることになっている。しかし、彼らが現地に行きつけない可能性の方が大きい。／地震と原発事故が重なった場合の一番の問題は、避難路が断たれてしまうことだ。道路が寸断され、交通機関が止まってしまったら、逃げようがない。屋内に避難しようとしても、放射能が入ってこないよう密閉する必要があるのに、地震で建物が壊れていては、それも期待できない。地震による負傷と放射線被曝が重なること、移動手段に障害があることで、医療体制にも困難が少なくないだろう。」更に、「避難の具体的方法と避難先の確保が重要だ。地震の後では届けられないかもしれないので、よう素剤や放射能防護用品を各戸にあらかじめ配布し、定期的に更新しておく必要もある。」

阪神・淡路大地震では、地震発生時に神戸市東灘区でLPGタンクガス漏れ事故があり、周辺住民に避難勧告が発令されたこともあって、原発事故を身近に連想しました。以上に書いたことは、すべて16年前の大地震に関連しての記述です。要するに、その大地震では幸いにも原発事故は起こらなかったの、「地震と原発事故が重なった場合の緊急時対策」は考えられませんでした。考えないことで、起こらないとみなされ、地震と原発事故は切り離されてしまったのです。

もちろん、それには何の根拠もなく、そんなことはあってはならないという思い込みがあるだけです。絶対に起こってはならないことだから、考えないし、考えたくないという主観的な願望だけが覗けます。いくら考えたくなくても、私たちの願望とかかわりなく、起こるときは起こるというようにして、今回の東日本の大地震では原発事故が起きました。原発があるかぎり、原発事故も起こりうると考えず、私たちは便利な生活を享受してきたとしか思われません。

16年前の大地震でも原発増設反対は叫ばれても、原発の撤去は叫ばれませんでした。いくら危険でも、原発による電気の供給なくして私たちの便利で快適な生活は維持しえないことが、誰にもわかっていたからです。いまの便利で快適な生活を手放さないために、厄介な原発に依存せざるをえないのであれば、私たちはその厄介な原発とどうやって対策を講じて付き合っていくか、を徹底的に考えなければならないのに、便利さと快適さだけを原発から受けとって、原発の厄介さは知らぬ振りして遠ざけてきたことを、「想定外」の言葉は示しています。

自然はいつだって人間の想定外にあります。想定外だから考えても仕方がないのでなく、想定外だからこそ考えなくてはならないのです。考えることの本質は想定外に向かうことにあります。見たくないことは見ないようにし、考えたくないことは考えないようにする、という私たちの思考の生理にしたがってはいは、いつまでも想定外の地震や原発事故に屈服したままでありつづけなくてはなりません。頻繁に発生する自然災害への対策は少しずつ進んでいるのですが、文明の進歩のスピードはそれを上回っているようにみえるし、当然被害も増大していきます。

私たちの文明的な生活が原発という厄介なものに支えられていることもそのあらわれですし、66年前の戦時中の広島、長崎への世界史上初の原爆投下という、言語に絶する悲惨な事態を体験してきた私たち日本人が、自分たちが作りだした原発の事故で再び地獄の苦しみを味わうことを想像すると、目の前が真っ暗になります。今回の地震による巨大な大津波の襲来は想定外と言えるところがあって、原発事故については今後十分検証されるでしょうが、いまの時点では起こるべくして起こったような思いを拭えません。

阪神・淡路大地震の体験の中に立てば、つくづくそう思われます。なんの根拠もなく原発事故は起こらないことが前提にされて、起こった場合の対策も講じずに過ごしてきたような気がします。私たち日本人の側に大きな問題があるのではないのでしょうか。私たちは一人一人のそんな自分を変えなくてはならないし、変わらなくてはならないことを痛感します。これはすべての面で言えることです。目を閉じていれば、危機はなにごとにもなく通り過ぎていく、というようなことはありえないことを、私たち日本人が今回の大地震を機に思い知ることで、被災された方々や被災地のあらゆる生き物に対するなによりの励ましになれば大変うれしい、と思って綴ってきました。